

美術を愛好していこうとする生徒をはぐくむ美術科学習指導の在り方
ーともに高め合うコミュニケーション活動をととしてー

栗原 理恵

1 研究テーマ設定の趣旨

学習指導要領が改訂されて以来、しばらくの間「学力低下」問題が大きな話題となっている。その火種は今もくすぶり続け、「ゆとり教育」の反動として、知識を詰め込むことに重点をおいた「受験学力重視」へ学校教育が逆戻りしていくのではないかという点が危惧されている。しかし、二つの間で振り子のように揺れ続けるのではない、子どもたちが真に必要としている学習について考えることが重要なのではないか。私たちは、次世代を担う子どもたちをどのように育ていけばよいのだろうか。

昨年度までの本校共同研究（全教科に関連する研究）では、「学ぼうとする力」を高めるために「学習意欲」に着目し、研究主題『「確かな学力」を身に付けさせる学習指導のあり方ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー』のもと研究を進めた。研究のまとめにより、学習意欲を高め持続させる多くの有効な手だてを検証することができたとともに、新たな課題として、学習に対する主体的な態度形成には互いに学び合う姿勢、すなわち「コミュニケーション」に関わる態度や力の育成、そしてそれらを活用する必要性が生じた。

美術科においても、新たな課題として「校種間連携」による学びの連続性ととともに、共同研と同様の課題が生じた。具体的には、学習状況の観察から、自分の考えにこだわるあまり、級友が発想したことや感じ取ったことを尊重しないというもの、すなわち自己中心的な生徒がいる反面、自分の発想や感じたことに自信がもてないために、教師や級友に確認しながら学習に取り組む、すなわち他者への依存が強い生徒もいるという、両極端な姿勢が見られるようになったことである。さらに、生徒と保護者への意識調査から、生徒は「デザインや工芸など」の学習に対して意欲が高いこと、また多様な表現作品を対象とした鑑賞学習へ期待していること、そして保護者は、生涯学習の観点から、社会人となってからも美術に親しむことができる「鑑賞の能力」を高める必要性を感じていることが判明した。

これらのことから、「コミュニケーション」を意識した、一人一人の表現や感受のよさを共感し合い、互いに高め合う学習過程を設定することにより、発想する力や感じ取る力が高まり教科の目標を達成できると考えた。

以上のことから、美術科研究テーマ「美術を愛好していこうとする生徒をはぐくむ美術科学習指導の在り方ーともに高め合うコミュニケーション活動をととしてー」を設定し、3カ年の研究を進めることとした。本年度はその1年目である。

2 前研究の成果と課題

1 前研究の成果と課題

(1) 研究の成果

資料1 「美術の生活化」

昨年度までの研究では、研究テーマ「主体的に創造する生徒を培う美術科学習指導のあり方—『美術の生活化』を図る授業への改善を通して—」のもと、「美術の生活化」により課題意識をもたせ、主体的に創造する生徒の育成を目指してきた。受動的な消費者を量産するのではなく、激変する社会の中で権利と義務の意識をもち、自らよりよい生き方を創りあげていく基盤をもつ生徒を、美術をとおして培おうとするものである。

3年間の研究の成果は、「美術の生活化」を根幹とした幅広く調和のとれた学習の中で、生徒一人一人のよさが生かされる

「美術の生活化」

「美術の生活化」には、生徒の将来までも含めた、日常生活の豊かな美的創造という視点と、文化の継承・創造による豊かな文化理解・共感という視点があげられる。

「生活を美的に創造すること」とは生活を豊かにデザインすることであり、具体的にはよりよく自分や他者や環境を含めた空間を創りあげていくことである。このことには、表現及び鑑賞の幅広い学習によって培われる基礎的能力を基盤とした、デザインや工芸などの学習で培われる態度や能力が深く関わるといえる。そして、「自他の文化を理解し共感すること」とは、日本や諸外国の美術文化をそれぞれ異なったよさとして共感的に受け止め尊重しつつ、新たな文化を創り出すことである。このことにも、美術の基礎的能力育成を基盤とした表現や鑑賞の学習で培われた態度や能力が深く関わるといえる。

美術の生活化 [生活を美的に創造すること
自他の文化を理解し共感すること

指導を継続することによって、生徒に美術を

学ぶ意義を理解させ、主体的な態度形成を図ることができるという視点を得たことといえる。具体的には、調和のとれた指導計画作成のために多様な作品を鑑賞の対象とした鑑賞学習を行うことによる「深い見方」と、生活との関連を意識したデザインや工芸などの学習を行うことによる「深い発想や構想の力」が身に付き、創造する喜びを味わうことにより、「美術を学ぶ意義」を理解させることができるという成果を得たことである。

(2) 新たな課題と展望

前研究を検証した結果、新たな課題として、小学校、中学校、高等学校での系統的な指導を行うための校種間連携を図る必要性和、よさや美しさを感じ取る力をさらにはぐくむための、ともに認め高め合う学習指導の必要性が生じた。

前者は、生涯に渡り美術を愛好していこうとする生徒を限られた授業時間の中で培うため、小学校での豊かな造形経験を生かし、高等学校での深い学習を見据えた中学校での学習の展開が必要であるということである。今後の展望として、幼・小・中・高・大の連携による美術教育発展を目指していきたい。これは、「系統性をもった指導と評価」を行うためだけでなく、各校に一人の配置が多い美術教師にとって、ともに高め合う仲間をつくり、増やしていくためともいえる。今後よりよい美術教育のネットワークが広がることを期待したい。

また、後者は平成13年度と15年度の意識調査結果を比較検証した際に浮かび上がった

た生徒の姿である。表現学習の発想段階や鑑賞学習において、生徒は2種類の姿勢で学習に取り組んで知る。それは、自分らしさにこだわるあまり、級友が発想したことや感じ取ったことを尊重しない・する余裕がない、すなわち自己中心的であるということと、自分の発想や感じたことに自信がもてないために、教師や級友に確認しながら学習に取り組む、すなわち他者への依存が強いというものである。特に、美術の学習において他者依存傾向が強い生徒がここ数年で増加した感があり、同様の感想を高等学校芸術科美術・工芸指導担当教員から聞かされたこともある。何気ない一言で、表したことや感じ取ったことのよさを伝えあう、すなわち互いのよさを認め合うためには、感じ取る力をさらに育むことが必要である。

これらのことから、ともに高め合う美術学習指導のあり方を探ることが、中学校美術教育の目指す「生涯に渡り美術を愛好し続けようとする生徒」をはぐくむことにつながると考える。校種間連携については、今年度より学校園連携ということで、幼・小・中・養護学校の教員を、教科や得意分野ごとにいくつかのグループに分け、それぞれで研修を行うという試みが始まっているため、特に、コミュニケーションする力を美術科の研究テーマの中心として設定したい。

3 本年度の研究

1 研究計画

一年次	(1) 研究仮説 (2) 「美術の教科性」とコミュニケーション
二年次	(1) 話し合い活動を重視した「鑑賞」の学習指導過程のあり方 (2) 見る立場を深く想像させる「デザインや工芸など」の学習指導過程の在り方
三年次	(1) 話し合い活動を重視した「鑑賞」の学習指導過程の検証 (2) 見る立場から発想させる「デザインや工芸など」の学習指導過程の検証 (3) 研究の成果と新たな課題

2 研究仮説

美術における「コミュニケーション」の形態は、基本的に送り手（作者）一人対各個人の関係であり、「形や色彩」などの造形要素（美術言語）を媒体とすることから「ノンバーバル・コミュニケーション」の形であり、受け手が多様に理解する許容量が大きいことから「マス・コミュニケーション」の形であるともいえる。

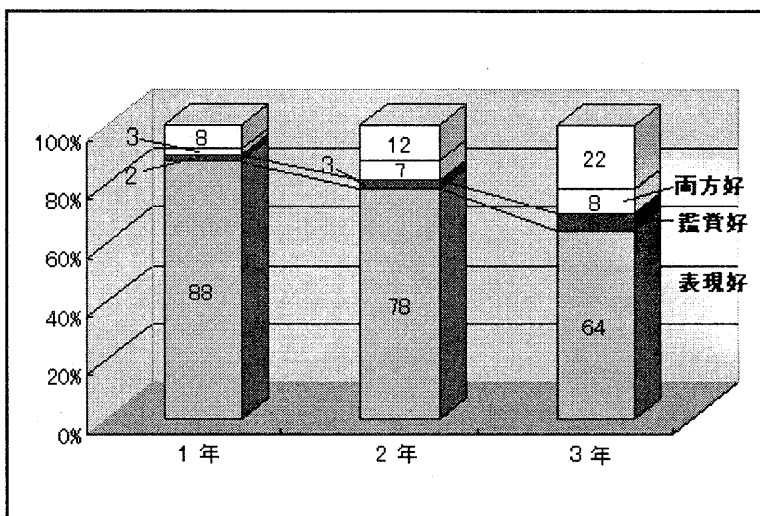
このことから、表現意図を理解し作品を深く感じ取る力などの「作品のよさや美しさを一人でも味わえる力」を高めるために、話し合い活動において自分や級友の考えに共感し合い、深めることを意識した学習指導過程を工夫することと、創造の喜びにつながる主体的な態度形成を図るために、「デザインや工芸など」の学習において「形や色彩」でコミュニケーションを図る場面を意図的に設定し、よりよいコミュニケーションを図ろうとする意欲を高める学習指導過程を工夫することにより、生涯に渡り「美術を愛好しようとする生徒」がはぐくまれると仮定した。

(1) 美術学習に対する生徒の意識

旧文部省初等中等教育局から平成7年9月に集計結果が報告された「美術の教育課程改善のためのアンケート」を参考に質問事項を作成し、本校各学年の生徒を対象に美術の時間に対する意識調査を行った。その結果は、表現と鑑賞の学習を比較すると全ての学年において鑑賞の学習に対する好感の割合が低い。その原因として、鑑賞学習の実施時数が少なく、多様な作品を鑑賞させていないことと、生徒が作品から感じ取ったことを言語化させることを意識しすぎるために、画一化した題材の展開が多いことが考えられる。さらに、質問調査によって生徒は鑑賞学習に対して右のような要望をもっていることも判明した。

また、表現学習内容に関しては「デザインや工芸など」の内容で身に付けた力が、社会に出てからも関連すると考えているようであった。

表1－鑑賞学習に対する生徒意識とその変容



資料2－鑑賞学習に対する生徒の要望

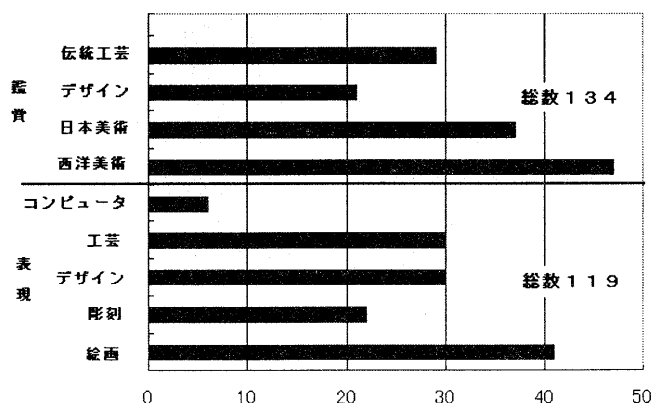
- ① いろいろな作品を鑑賞したい。
- ② 一人で鑑賞できるよう作品の見方を学びたい。
- ③ 有名な作品や作家の解説を聞きたい。
- ④ 美術館につれて行って欲しい。

(2) 美術学習に対する保護者の意識

本調査は、平成16年12月に実施した本校授業参観参加第3学年保護者約80名を対象に行った。

中学校美術学習において重視すべき内容について質問した結果、右グラフ2に示されたとおり「西洋絵画・彫刻鑑賞」、「絵画表現」、「日本絵画・彫刻」の3項目が際だって高い調査結果となった。さらに、表現学習と鑑賞学習を比較すると表現119名、鑑賞134名というように鑑賞学習重視への期待が大きいことが分かる。これは、次頁グラフ3「日常生活での美術との関わり」を質問した結果の「表現20

表2 「美術学習において重視して欲しい内容」
中学校美術学習で期待する学習内容

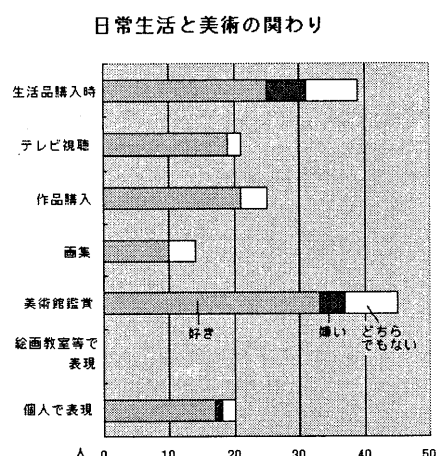


名、鑑賞144名」から分かるように、生活する中で表現する機会がなくとも、鑑賞することができる。さらには、中学生時にあまり行われなかった鑑賞学習を行うことにより、鑑賞の能力が高まり、深く作品を味わえると考えているためではないだろうか。

これらの調査結果を総括すると、中学生のときには鑑賞学習指導をあまり受けていなかったが、社会人となつてからの美術との関わりの多くは美術館での作品鑑賞であることから、子どもたちには鑑賞対象が多様な鑑賞学習指導を行って欲しいという保護者像が浮かび上がる。

このことから、自己の美的価値観を形成させる鑑賞学習が必要である。

表3 「美術との関わり」



3 「美術の教科性」とコミュニケーション

(1) 美術の教科性

資料3 美術の教科性

学習指導要領では、「美術の教科性」を「美的・造形表現・創造」、「文化理解」「心の教育」の3つの柱としてとらえ、各目標や内容を構成している。それぞれが深く関連付いているものであるが、見方によっては①を表現②を鑑賞ととらえることができる。

「美術の教科性」
 中学校学習指導要領解説－美術編－
 第2章目標及び内容 第1節美術科の目標
 ① 美的、造形的表現・創造としての教科性
 ② 文化・人間理解としての教科性
 ③ 心の教育としての教科性

そして、③は、表現と鑑賞の全般に渡るものといえる。

①の教科性は、自分の感情や考えを形、色彩、材料などの造形要素（美術言語）で表すことであり、②の教科性は、伝統文化や人類遺産を創造・理解・共感することである。これらの表すことや感受すること、そしてそれらによって内面を高めることは、形、色彩、材料などの造形要素を媒体として行われる。また制作や鑑賞の過程では言語もそれに加わり、表現の効果や作品の背景について言語化することで、媒体である造形要素への理解はより深化すると考える。

(2) 「コミュニケーション」の意味

本校共同研では、3カ年計画で「コミュニケーション」を研究のキーワードとして研究を進めている。これは、「学習意欲」を研究のキーワードとした前研究の総括に際して生じた課題の一つであるためと、コミュニケーション不足による諸々の不都合を指摘する世論に答えるためである。

ここで論じられる「コミュニケーション」のほとんどは、言語を媒体とした「バーバル・コミュニケーション」や一対一の関係で共通言語を媒体とした「パーソナル・コミュニケーション」である。「コミュニケーション」とは「伝達・交換」の意味であり、媒介を

通じて人から人へ思想や情報、態度を伝えることであるが、その行為の根底にあるラテン語の「共通する」「分かち与える」という意味の「共有」という精神が重要と考える。

美術におけるコミュニケーションの中心は、前述したものと若干異なり、形や色彩を媒体とした「ノンバーバル・コミュニケーション」であり、その特徴から「マス・コミュニケーション」に近いものといえる。そこで、本研究において美術の「コミュニケーション」をとらえるために、「コミュニケーション」の形態を次のようにまとめた。

資料4 「コミュニケーション」の形態

○コミュニケーションの形態

A	バーバル（言語）	:	B	ノンバーバル（非言語）
①	パーソナル	:	②	マス

① パーソナル・コミュニケーション

一対一の関係で共通言語を媒体とすることが多い。送り手と受け手の間には交流が保たれ、フィードバックを行いながらコミュニケーションが進行していくものであることから、送り手の意図はある程度厳密に受け手に理解され、さらに送り手と受け手の立場が入れ替わり進行していく。

② マス・コミュニケーション

組織对各個人の関係で、言語以外のものも多く媒体とする。送り手と受け手の間には親密の関係はなく、必ずしも送り手の意図が十分に理解されることはない。さらに、受け手の主体的条件は無視されがち、すなわち重要視されるのは以下に受け手が影響を受けたかということであり、受け手の考えや感情は送り手にフィードバックされることが少ない。前者に比べると、未完成なコミュニケーションといえる。

美術における「コミュニケーション」の形態は、トイレマークなどのデザインされたものを仲介とした形や色彩（美術言語）によるコミュニケーションはAや①の形に近いが、基本的に送り手（作者）对各個人の関係であり、言語を媒体としないことから、Bや②の形が多いといえる。

(3) 美術科におけるコミュニケーションのとりえ方

先に述べた本校共同研究においては、多くの教科では言語を媒体としたコミュニケーションが研究の対象の中心となっている。けれども、美術におけるコミュニケーションは「形や色彩」などの造形要素を媒体の中心としていることが特徴といえる。「形や色彩」を媒体とした表現は、言語表現では複雑になる伝達内容でも図にすることにより一目で分からせることができるなど、非常に便利なコミュニケーションのツールである一方、送り手が伝えようとする内容を受け手が異なる内容として理解する危険性をはらむ「不完全なコミュニケーション」であり、受け手が取りたいと思うように受け取ることができる、許

容性の大きなコミュニケーションでもある。特に、デザインや工芸などでは正確さも必要とされるが、絵画や彫刻などでは相手に正確に伝わるかという点よりも作者の表現したい点を重要視する傾向があり、作者の表現のもつ力と、鑑賞する側・受け手側の感受性や作品に関わろうとする姿勢により、コミュニケーションの質が変わってくる。しかし基本的に美術は、形や色彩、材料などの造形要素によるコミュニケーション抜きには語ることができない。

これらのことから、言語を媒体とした「バーバル・コミュニケーション」を、表現を深く感じ取るための「鑑賞の能力」を高めるための手だてとして用いることと、「デザインや工芸など」の学習指導過程において「形や色彩」でコミュニケーションを図る場面を意図的に設定し、よりよいコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることを2つの柱として研究を進める。本研究においては、共同研や他教科との関係から、また、鑑賞活動の必要性から考えて、3年間の研究期間の中で、徐々に前者を研究の中心としていくことを付け加える。

4 美術におけるコミュニケーションを意識した実践

これらの実践は、今後「コミュニケーション」を目標達成のために活用することによって、さらなる改善が予想できるものである。

(1) 話し合い活動を重視した鑑賞学習

世界児童画展の作品鑑賞の実践

- ・ 題材名「WORLD WATCHING -世界を見つめて-」
- ・ 第2学年4時間扱い 実施時期 5～6月

日本の作品とアジアを含む緒外国の少年少女達（9歳から15歳）の作品を鑑賞した。世界児童画展で入賞した作品をお借りして、実際に本物の作品に触れながらの鑑賞するというものである。子どもたちが様々な国の同年代の者の作品を鑑賞することで、絵画作品により親しみながら鑑賞することができるように、また他国を身近なものとして感じられるように考えた。鑑賞の授業では西洋美術を取り上げることがどうしても多くなりがちだったため、アジアの美術にも目を向けること、作品から作者が暮らす国の生活環境・文化の違いによる表現意図や描画法の工夫を感じ取り、各国の文化継承や創造の違いについて学ぶことも目的のうちの一つである。グループに分かれて、作品を一つ選択して、作品の構図や配色について、自分たちの過去の作品と比べながら話し合わせたり、文化について調べさせたりした後で、最後に発表会を行った。発表を聞いて得た自分たちの意見を付箋紙を使って他のグループに伝えるという方法で、意見交換を行った。

まず意見を書くことで考えを明確にし、それから話し合い、発表に入るという形をとり、意見交換をしやすいように配慮し、自信をもって話し合いや発表が行えるようにした。しかし、自分の意見を書いて話すことはできても、級友の意見を聞いて安易に同調してしまう者もあり、自分とは違う意見の人と話し合って、造形的な面から深く作品を見つめ直すところまではいかなかった点が課題として残った。最後のまとめに時間を割き、より深めたい。

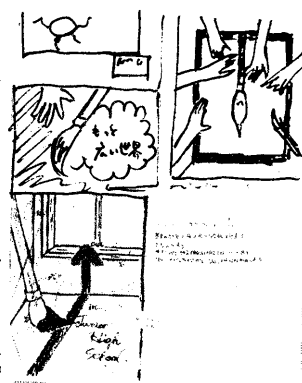
(2) 見る立場の感じ取り方を想像させるデザインや工芸などの学習指導

卒業を祝うメッセージを伝える実践

・題材名「卒業を祝うポスター ―卒業生に伝えたいこと―」

・第2学年7時間扱い 実施時期 12～3月

卒業を間近に控えた3年生に、卒業の喜びをさらに味わってもらうことと、1年後に控えた自分自身の卒業を現実のものとして理解することを目的として、A4版のポスターを描かせた。表現主題を決めアイデアを練る段階では、「卒業」という言葉から連想する形や色を話し合わせ、イメージが共通する図柄をあげさせた。その結果、「さくら等の花びら、将来を表す階段や扉、道などが、一般的に「卒業」をイメージするものであるが、発想に捻りがない」との考えにまとまった。この話し合い活動は特別なコミュニケーションの技能を活用したものではないが、このことにより形や色彩で分かりやすく伝えるだけでなく、見る側に考えさせることや好印象をもたせることが重要であることに気付かせることができたことが成果といえる。



課題としては、発想の段階に7時間中3時間を当てたため、じっくりと取り組んで表現させることができなかったことがあげられる。

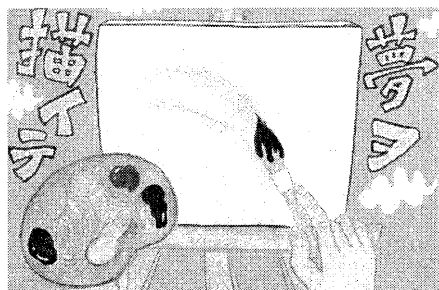


写真 将来を自分で描く

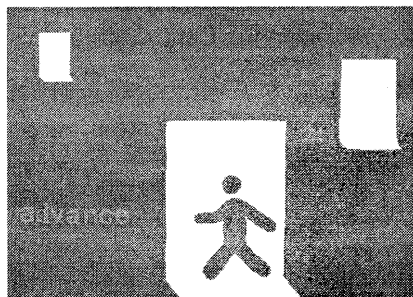


写真 未来にはいくつもの扉がある

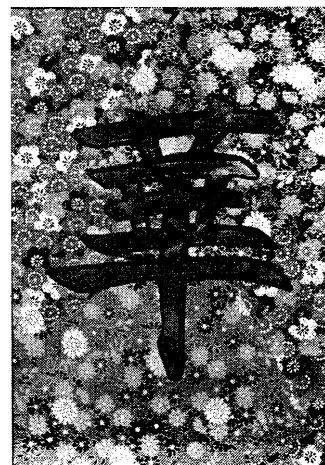


写真 自分の華が咲く

(3) 色や形の感じ取り方の多様性を知るデザインや工芸などの学習指導

色や形でイメージを表現する授業の実践

・題材名「音をイメージして描く」

・第1学年2時間扱い 実施時期 4～5月

デザインの基礎として、配色の効果や構図の工夫について学ぶことを目的として、スケッチブックに小さな正方形(5～7 cm)を4つとり、生活の中で感じたことのある「音」「音楽」をイメージした無彩色・有彩色(同一色相の配色・類似色相の配色・補色

の配色)による色面分割を色鉛筆で行い、互いにタイトルをつけ合うという授業を行った。作品は、机の上に並べて展示し、鑑賞者は心に触れた作品に出会ったらタイトルを考え、付箋紙に記入し作品にどんどん貼っていくという鑑賞法をとった。作者には、自分のつけたタイトルと似たタイトルをつけられたり、全く違うタイトルをつけられたりすることで、自分の作品を受けとめる側(鑑賞者)の思考や感受性についての発見があったようだ。また、鑑賞者は、「美しい」「好きだ」と感じる色や形の作品に出会ったときに、素直に感動し、自分と同じことを美しいと思い作品に表す人物が同じ教室の中にいるということを楽しみとし、もっと色や形について学びたいという感想をもっていた。お互いに同じ感動を「共有する」という、コミュニケーションの中でも重要な体験をすることができていたようである。課題としては、つけられたタイトルに対しての作者の考えや感想について、個から全体へと返し、個人の考えを深めるといった活動まで行うことができずに、慌ただしく感想を記入して終了してしまった点が挙げられる。また、初めから何かをイメージして面を分割・着色できた者ばかりではないため、作者自身でも特にイメージがわいてこないことがあった。発想・着想の段階で、さまざまなイメージがわくような手だてを考えたい。

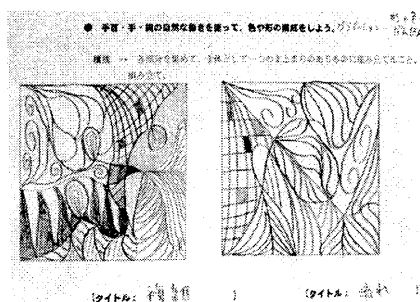


写真 無彩色の構成

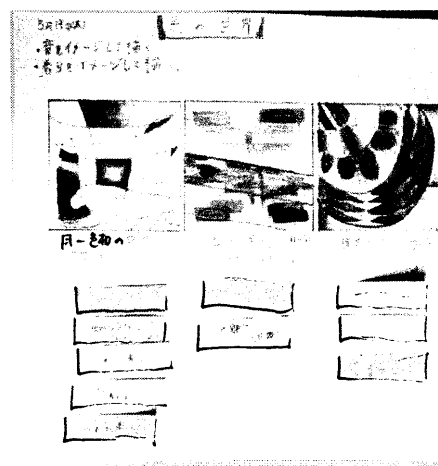


写真 有彩色の構成

4 研究の成果と次年度への課題

日常の中で芸術作品を鑑賞する場合、例えば美術館で作品を眺める時など、基本的には静かに・黙って・他の鑑賞者の迷惑にならないように作品を見ることが多い。この時には、作品から何がしかの印象を受けてもそれを自分の中にひっそりとしまっておくことになり、文字などで記録した場合は別だが小さなものだとそのまま忘れてしまうことがある。しかし、人出が多くざわついた雰囲気の中では周囲の人と作品を見た感想を言い合い、相手が口にした何気ない一言から新しい考えや新たな気づきが生まれることがある。言語を媒体とした「バーバル・コミュニケーション」が作品を深く鑑賞する上でプラスになったと感じるのはこのような時である。「書く・読む・聞く・話す」ことを中心に鑑賞の授業を組み立ててきたが、成果としては、初めは小さな気づきだったが、周囲の人と話し合い、

同意の意見をもらうことで自信をもってはっきりと自分の考えを表す手助けとなったことがあげられる。逆に、周りの意見に流され、安易な賛同から鑑賞を深められずに終わってしまうこともあった。作品からある「物語」を紡ぎ出し、新たに「ものがたる」過程で、受け手自身の物語・価値観に新たな発見が起きるような、コミュニケーションのある鑑賞の授業がもてたらと考える。

見る立場の感じ取り方を想像させるデザインや工芸などの学習指導では、自分と作品との対話、どのように制作すると相手に自分の意図が伝わりやすいだろうかと発想をふくらませていくことが大切であり、一人で考える時間も重要である。作品との対話を深めるために、級友あるいは教師などの周囲の人間とコミュニケーションをとることを、どの段階でどのように入れ、活用していくとよいのか、研究したい。特に、制作途中の教師と生徒のコミュニケーションの在り方により、作品と生徒（作者）との対話の深さも、作品と受け手の対話の深さも変わってくる。

また、これらをとおして、美術科におけるコミュニケーションでは、「正確さ」も大切であるが、ある程度受け手の自由を保障したうえでの「価値観への揺さぶり」も重要ではないかと考えるようになった。事後指導を大切にし、人とあるいは芸術作品とより深くコミュニケーションしていくためにどのような具体的な手だてが考えられるか、次年度さらに研究していきたい。

<参考・引用文献>

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 『造形教育事典』 | 真鍋一男・宮脇 理 監修 1991 年刊 建帛社 |
| 『ビジュアルコミュニケーション』 | 藤澤英昭 著者代表 2000 年再刊 ダヴィット社 |
| 『美術科教育の基礎知識』 | 宮脇 理 監修 2000 年再刊 建帛社 |
| 『改訂学習指導要領の展開美術科編』 | 遠藤友麗 編著 2000 年刊 明治図書 |
| 『中学校新教育課程の解説 美術』 | 遠藤友麗 編著 2000 年刊 第一法規 |
| 『教職研修 10 月号増刊 子どもたちのコミュニケーションを育てる』 | 秋田喜代美 編集 2005 年刊 教育開発研究所 |